

# 鉾建ての技で耐震補強

祇園祭の鉾建ての伝統技術「縄がらみ」を耐震補強に活用した古民家カフェが7月末、亀岡市にオープンする。縄がらみは縄を美しく巻いて巨大な鉾を組み立てる技術。考案した建設会社によると、民家への転用は全国初の試みという。強度に加えデザイン性も優れた京ならではの新たな工法として普及を目指す。

会社は古民家再生に取り 市南区。「縄がらみの技術組む石山テクノ建設(京都)は放下鉾作事方の棟梁で谷

## 「縄がらみ」全国初活用、亀岡に古民家カフェ



祇園祭の鉾建ての伝統技術「縄がらみ」を生かした耐震補強。縄は京組紐を使う(7日、亀岡市、沙桜里庵)

## 京の建設会社「美しく強い」工法 普及狙う



口造園(西京区)社長、谷口康夫さん(74)が提供した。

縄がらみは、縄が重ならないようきつく締め上げながら巻き、一部分が切れても強度を保てるよう工夫されている。巻き上がった時の美しさや、正面から見ても着物のように「左前」にするなど細部までのこだわりが、鉾ごとに受け継がれている。

谷口さんが担う放下鉾は最大級の鉾。揺れながら巡行する約12トンの重さを縄だけが支える。日頃から縄を扱う造園会社として「美しく強い」縄がらみにこだわることが、鉾建てが終わると縄は装飾で隠れてしまう。谷口さんは「美しく仕上げたところをもっと見てもいい」とも思っていたと話す。

一方、石山テクノ建設は、補強工事でポリエステル製のベルト「SRF」を梁や柱に巻き付けてきたが、見た目が悪く室内には使えない



放下鉾の縄がらみを記録した写真

くかった。そこで、谷口さんに協力を依頼。亀岡市で再生中の古民家「沙桜里庵」の室内の梁と柱の接合部分にSRFを取り付け、その上から鉾建てと同様の技術

で巻き上げてもらった。鉾では福知山産のわら縄を使うが、建材としての強度やデザイン性を考慮し「Nomura Art Plant」(左京区)の京組紐

## 大津祭曳山 3年ぶり再開へ

湖国三天祭りの一つで、国の重要無形民俗文化財の「大津祭」について、祭りの運営に携わるNPO法人などは11日、10月9日に3年ぶりに曳山巡行を実施すると発表した。新型コロナウイルスウィルス禍の影響で2020年秋から山建てや巡行は中止し、神事のみが営まれてきた。

各曳山を所有する曳山責任者会とNPO法人大津祭曳山連盟が大津市内で会見し、新型コロナウイルスの感染対策を実施した上で、山建てや曳山巡行、お囃子の文化継承を目的に曳山行事を再開すると説明した。今後、新型コロナウイルスの感染拡大があれば、行事内容を見直すという。

同連盟の元田栄三理事長は「3年ぶりの巡行で技術の承継に危機感はあるが、

を使用した。金貨で留めるよりも丈夫で美しい仕上がりがなり、石山孝史社長(71)は「今までこの技術が建物に使われなかったのが不思議なくらい。失われていく京町家の再生などにも活用していきたい」と今後の展開を想定。谷口さんも「たくさんの人に見てもらう機会になる。年1回しか使わない技術だったので、技術継承にもなっている」と喜んでる。(小川卓宏)

町にお囃子が響くことはうれし」と語り、祭りを仕切る当番町の森田光正さん(62)は「曳山巡行が無事に安全に執り行えるようにしたい」と述べた。

大津祭は天孫神社(大津市京町3丁目)の祭礼で、江戸初期に始まったとされる。からくり人形を載せた豪華絢爛な13基の曳山が市中心部を巡行する「本祭」が最大の見せ場で、例年多くの観光客が訪れる。

今年、9月16日に巡行順を決めるくじ取り式があり、10月2日に山建て、同8日が宵宮、同9日が本祭の予定。(富田芳夫)